

中国留学最終レポート

私は今回埼玉県親善大使として、中国内陸の都市：山西省太原市にある山西大学に留学した。山西省と埼玉県は友好提携を結んでいる。友好を象徴する施設、その名も埼玉県山西省友好記念館というものも存在するが、埼玉県でも山西省でも、この友好提携の存在を知っている人は少ないようだ。中国では行く先々で出身国に次いで出身地域を尋ねられることが多いが、埼玉県という名前すら知らない人がほとんどだった。多くの中国人の意識にあるのは東京ぐらいのようだ。中国でも太原市の地方政府関係者や交換留学に携わる人はこの協定について知っていた。埼玉県に関しては、日本から持って行った中国語版のパンフレットなどを用いて紹介したこともあった。

初日、山西省太原市にある太原武宿国際空港に着くと、山西大学の国際交流の担当者にあたたかく迎えられ、車で移動し大学に着くとキャンパス内にあるレストランで山西省の名物である麺でもてなされた。中国の麺は、日本人がイメージするラーメンなどとは全く異なっている場合が多い。例えばその時に私が食べた麺というのは、平たく正方形に近い形をしたものが積み重なっている状態のものだった。大学のキャンパスにあるのはそのレストランだけではない。中国の多くの大学のキャンパスがそうだが、複数のレストランや喫茶店のほか、ホテルもある。なかにはバーがある大学もある。食堂も広く、食堂のための建物があり複数の階にわたって店が並んでいる。クリーニング店などを含んだ大きなスーパーがいくつもある。学生寮もキャンパスの中にあり、寮だけでなく住宅街や公園もあるのだ。日本の大学のキャンパスとは概念がだいぶ異なるようで、中国の大学のキャンパスはひとつの町のようにになっている。私は中国で10か所以上の大学を訪れたが、地域や大学の規模による差は多少あったものの、どのキャンパスもやはりそのようであった。また山西大学の場合、大学の敷地内にありながらも大学の直接の管理下にはなく、自由に商店街や屋台が並びいわば特別行政区のような場所もあり、その場所はキャンパス外の地域と直接つながっており、どこまでが大学の敷地なのかも分からない。このような構造も、中国の大学ならではの感じられる。

私は語学研修生として国際教育交流学部という所に配属されていたが、そこでの中国語の授業は、総合中国語・会話・閲読・聞き取りというように科目が分かれている。このような体系的な学習法は、実践的な語学力を身につけることに適している。一般の中国人が学ぶ本科の外国語学部でもこのようなやり方を採用しており、留学経験がなくても専攻する外国語が流暢な学生も少なくない。山西大学には、外国語学部が開講する外国語科目の他に、学生が運営する各語学系サークルがあり、そこで学ぶ学生たちもいる。もちろん専攻以外の学生も交えてだ。私も日本語サークルの集まりに参加し、日本語を教えたことがある。日本人の少ない山西省の大学でも、日本語を学ぶ学生は少なくない。

私が中国の大学での様々な取り組みを見て気づいたのは、中国の大学では学生による自主的な活動が可能な機会が幅広かつ多様に存在するという点だ。私が今までのここでのレポートで取り上げてきた例を振り返ってみよう。ある大学院生は、自分の専攻分野の実践

の一環として、大学キャンパスの食堂やスーパーが入った建物の一角でとある店の管理を任されている。ある語学系サークルのイベントでは、一日だけ大学の施設の一角を使ってメンバー自ら店などを開き、ユニークな商品やメンバーが作ったお菓子などを販売したり様々な国の商品を集めてオークションを行ったりと、文化祭のような活動が行われていた。学生自らが運営するテレビ局やラジオ局の団体も学内にはある。複数の大学から学生が集まり、国際貿易の場を想定して学生が商品を紹介するなどの模擬的活動もある。時には学部ごとに大規模な歓迎会をはじめとしたイベントが企画され、その学部をテーマに様々な活動が行われている。学内イベントである山大好声音では、音楽専攻以外の学生も交えて歌を競い合う。学習面では、国際的な比較を行う授業に複数の専攻から学生が集まり、学生たちは講義を聞くだけではなく議論をし、しばしば私のような留学生が招かれ、外国人の生の声を聞くことができるなど、ユニークな授業がある。このほか、学内の施設に、大学院の教授が運営する会社の事務所があり、その教授のクラスで学ぶ大学院生たちがしばしばそこに通うといった状況もあった。これらの環境は、学生に対して様々な可能性を与える重要な機会であると私は考えている。このような環境でこそ学生は様々な経験を通して実学を身に着けることができる。また、学際的な場も多いため、異なる専攻の学生が意見を出し合うことで新しいアイデアが生まれることもある。そこには、大学が学生に多くの機会を与え、自主的な活動を促進しているという背景が見られる。これらは、日本も学び取り入れることができる部分だろう。

さて私は今回親善大使、つまり両国の友好をテーマに派遣されたわけだが、中国と日本といえば、やはり目立つのは政府間でも個人間でも関係の悪さだ。中国と日本との関係が悪いことは、個人個人が相手国の社会に対して持っているイメージとも一致している。日本人から見て中国といえば、社会主義・共産主義の一党独裁による抑圧的な政治の中、不条理な社会が築かれている、とイメージしがちなのであろう。そもそも、ここで出てきたキーワード：「社会主義」・「共産主義」・「独裁」、これらどれをとっても日本人の中では良からぬものという色眼鏡の視野の中に入ってしまう。しかし実際には、私が感じた中国は非常に自由で、生き生きとしている。それは、いわゆる自由主義といわれる社会とはまた異なった自由であり、概念が異なる。以前のレポートでは、友人が教えてくれた労働者にとっての中国の社会主義の長所について紹介した。中国では多くの企業が、国が担っている国有企業であり、利益なども政府が調整しているため常に効率ばかりを追い求める必要がないという点である。これによって、残業も過度なストレスもなく、個人が快適に働ける職場を築くことができる。このことは、実際に中国で働く中国人の生活を見ていても感じ取ることができた。一般の中国人に中国共産党に対する考えを尋ねた際にも、中国に相応しい方法だと答える人は多い。日本では民族に対する弾圧が話題になることもあるが、これも実際にそういった地域に行ってみれば、日本でイメージされるものとは異なっている。例えば内モンゴルでは公共交通機関で中国標準語と並んでモンゴル語の放送が必ず流れ、商店街にはモンゴル語で書かれた看板が並ぶ。私が雲南省の麗江に行ったときには、もう使える人も少なくなったナシ族の

トンパ文字が、文化保護のためか公共施設の至る所に表記してあった。また四川省の成都を訪れた時には、チベット族が暮らす地域があり、民族固有の店が並び、書店にはチベット語の本が並んでおり、民族の大学もあった。これも私が中国で目にした現実である。

日本では一般に中国人個人に対しても、マナーが悪い、非常識的など、悪いイメージが伴うことは少なくない。しかし、実際に私が出会った多くの中国人は非常にあたたかい。単にあたたかいといっても色々あると思うが、中国人のあたたかさの特長のひとつとして、労力を惜しまず相手をもてなす精神があるという点があげられる。例えば私が内モンゴルに行った時にも、同行した人の知人の知人、つまり我々にとっては初対面になる相手だが、その人が内モンゴルに住んでいるということで連絡をとったところ、現地で出費を惜しまずホテルまで手配してくれたということがあった。中国人は個人としての他人に興味があり、人としっかり向き合っただけで関係を築いている。電車の中などで見知らぬ人同士の間でも自然にコミュニケーションが生まれる。そして、中国人はひとりひとりが思想を持っている。周囲の大多数の雰囲気になんとか追従するのではなく、個人が主体を持っていて、常識にとらわれない。その上で、社会主義の掟は守り、合わせる部分は足並みをそろえる。中国では、他人がどう言おうと自分はこうだ、という部分と、中国特有のメンツを重視する考え方による人間関係、これら両極端が矛盾なくかつ相互に影響し合っただけで個々人の中に存在する。ここがまた日本人から理解しにくい部分でもある。ただし、これらもまた傾向のうちの一側面であり、ステレオタイプに過ぎないということも忘れてはならない。

ここで実際の中国人の様子を、日本人が持っているイメージの中にある具体的な部分と全く異なるとは言わない。問題は、同じような要素であっても、それを悪くとも良くとらえるかである。ほぼ単一民族国家の島国で「日本人」だけ見て育つ日本人は、外国人や異質な人物を判断するときも自分が慣れ親しんできた価値観・世界観にとらわれがちだ。ここでその価値観・世界観を変えてみる必要がある。つまり、視点を変えて見ることで、見えてくる世界も違う。これはなにも日中関係の問題に限ったことではなく、外国人をみるときに、そしてまた、国内でも思想や習慣の面で自分たちとは異なる他者と出会ったとき、本来常に必要な観点だということに改めて気づかされる。

さて私は来学期から、この山西大学に本科生として残ることが決まった。中国には兵役はないが、大学本科に入学してきた新入生は、学期始まりの月つまり9月は、大学としての必須科目扱いとなっている軍事訓練に専念することとなる。その後10月は国慶節の連休となるため、平常授業は連休明けからだ。外国人留学生である私は軍事訓練が免除となるため、10月からが本格的なスタートとなる。私が山西大学に入った当初は、まだこの大学で本科を学ぶということは決めていなかった。私が今回本科生として残ることを決めたのは、やはり今回の留学中の経験からであり、中国人をはじめ各国の人々との交流にも意義を感じ、そしてまた中国を本当に好きになれたからだ。将来は、これらの経験や語学などを活かして、日中関係のみならず国際社会と関わっていく仕事をしていきたいと考えている。

杉浦聡太